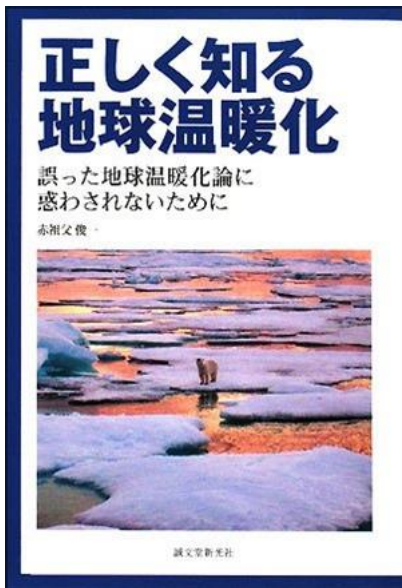


## 赤祖父俊一『正しく知る地球温暖化』の要点

北極圏研究における世界的権威であり、地球温暖化について米国議会で証言をしている赤祖父俊一名誉教授が、2008年に誠文堂新光社から出版した本の要点を紹介する。



○地球温暖化問題を日本を離れて国際的な観点から眺めると、政官民一体となって「地球温暖化問題」について騒ぎ立てているのは日本だけではないと思われるのである。日本の現在の状態は「米国前副大統領アル・ゴアを救世主として温暖化狂想曲で踊っており、報道はその調子を鼓舞して太鼓を叩いている」とでも表現しようがない。

(p. 15~p. 16)

○温暖化の原因について、自然変動が6分の5、人間活動の影響はわずか6分の1であることを第4章で示す。(p. 28)

○赤外線を反射する分子は炭酸ガスの他に水蒸気、メタンガス、その他がある。それらの効果の中で最も大きいのは水蒸気であり、温暖化の95%はこの水蒸気による。(p. 51)

○過去少なくとも4回繰り返した氷河期において、気温と炭酸ガスの量の変化には非常によい相関関係がある。ここ数年、気温と炭酸ガスの時間変化についての詳しい研究が始められている。それは炭酸ガス増加が気温に先行したか(すなわち、炭酸ガスの増加が気温上昇を生じたのか)、気温上昇が炭酸ガスに先行したか(すなわち、気温が上昇したために炭酸ガスが増加したのか)、という研究である。現在南極の氷を使って発表されている研究段階では、気温が800~1300年ほど先行している結果である。すなわち、炭酸ガスの増加によって気温が上昇したのではなく、気温が上昇したため炭酸ガス量が増加したということである。(p. 57~p. 58)

○国連 IPCC は2100年までの気温上昇を小数点を加えて発表しているが(例えば、5.8℃)、これはまったく無意味である(多くのモデルの結果の平均としても)。一般市民に小数点まで正確に予測できるという印象を与えたいのであろうか。彼らの予測値を信用するとしても、実際は4℃±3℃、すなわち7℃か1℃かわからないのである。IPCCの考察が圧倒的に優位なのは、彼らの結論を一方的な情報によりセンセーショナルに報道するプロパガンダ・マシーンを背にしているためである。(p. 69~p. 70)

○第4章では、自然変動を同定し、現在進行中の温暖化からそれを差し引くことによって、人間活動による炭酸ガスによる温暖化率を推定した。そして現在の温暖化の6分の5が自然変動によるもの、すなわち炭酸ガス温室効果はわずか6分の1であることを証明した。(p. 71~p. 72)

### 【第4章紹介】

[図4-1]は、IPCCが作成した図である。1880年~2000年の気温変化は、大体直線で表すことができる。

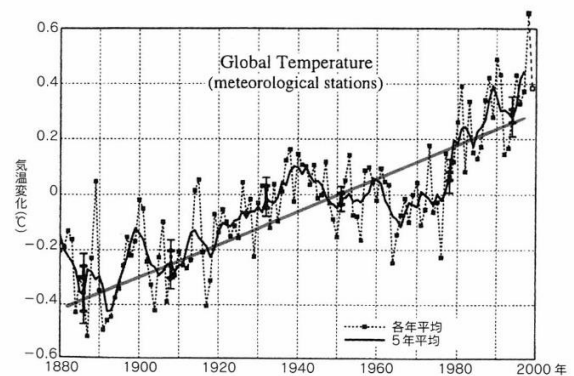


図4.1 図1.1に示された気温変化は大体直線で表すことができることを示す。

[図4-2]は、直線の上下へのブレとして模式的に書き直すと、こうなる。

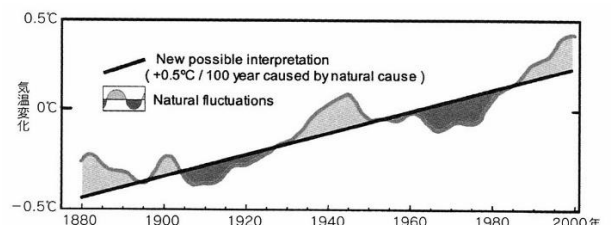


図4.2 図1.1の変化を簡単に表わすと、図4.1の直線の変化と、それに乗った、ポジティブ(プラス)とネガティブ(マイナス)の変化がある。

[図4-11]は、古気候学の成果から、3000年の海水面温度を推定したものである。現在よりも、気温が高い「温暖期」が1000年前、1500年前、3000年前にあったことが分かる。IPCCは、2100年には、気温が5.6℃以上上昇するというコンピュータ・シミュレーションを発表しているが、それは、

不完全な気候モデルによる失敗作だろう。100年後に、現在より0.5℃か0.6℃気温が上昇していると考えるのが、自然科学を幅広く勉強した人間の判断になる。

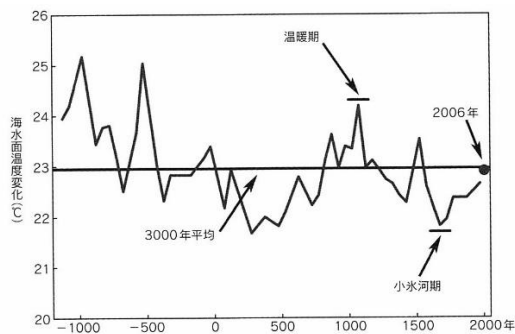


図4.11 北大西洋の海底堆積物質の酸素同位体 ( $O_{18}$ ) から推定した気温。1000年頃の温暖期、小氷河期、さらに紀元前には現在より大きな気温変動があったことが示されている (Keigwin, 1996年)。

※人類が化石燃料を大量に燃やし始めたのは、第2次世界大戦が終わった1946年以降である。決して、産業革命後から大量に化石燃料を燃やしていた訳ではない。なのに、産業革命後1880年から気温が直線的に上昇しているのは、何故だろう？ IPCCが「人類が出したCO2を悪者にしたがために、わざとウソをついている」のである (大村)。

※IPCCは、1800年まで少し続いた「寒冷期」が終わり、1800年以降「温暖期」に移行したことを「わざと見ようとしていない」のである。人為効果で地球温暖化が起こっていないとすれば、それは「自然課程＝自然現象」と考えるのが、まともな判断である (大村)。

※赤祖父俊一アラスカ大学名誉教授は、CO2排出が原因で温暖化した効果と自然変動が原因で温暖化した効果の比率を、目一杯安全サイドで計算している (大村)。

○直線近似の傾きは、0.5℃/100年ほどである。一方国連IPCCは、CO2による温暖化は、0.6℃/100年としている。  
このことから、6分の5が自然変動で、6分の1が人為CO2によるという結果になる。 (赤祖父P.91)

※AALAニュースで書評『気候変動の真実』で紹介させていただいた、クーン博士は「地球の熱スペクトルに対するCO2の影響 (図2-3)」を分析して、「現在の大气中CO2濃度が倍増しても、捕まえられる熱の量は1%しか増えない」と赤祖父名誉教授よりも厳密な結論を得ている (大村)。

※つまり、国連IPCCは、全てを人為CO2によると結論付ける誤りを犯している。きっと、政治目的のために、ワザと誤りの論理を組み立てているのだろう (大村)。

※こんな簡単な検証によって、国連IPCCが如何にデータメな組織であるかが暴露されてしまう。皆様も、国連IPCCの

政治屋に騙されないようにしましょう (大村)。

### 【赤祖父俊一略歴】

1930年、長野県生まれ。1953年東北大学理学部地球物理学科を卒業。同大学院在学中の1958年にアラスカ大学大学院に入学。博士号を取得。アラスカ大学地球物理研究所助教授を経て、1964年に教授に就任。1986年から1999年まで、アラスカ大学地球物理研究所の所長、2000年から2007年まで、アラスカ大学国際北極圏研究センター所長を務める。オーロラをはじめ、地球電磁気学や北極圏研究における世界的権威。

### P. S.

赤祖父俊一名誉教授は、社会的な事柄についても、辛辣な意見を述べている。

(a)自然科学の問題であるべき温暖化問題は現在、国際政治問題にまで発展してしまった。国際会議では、先進国は「石器」時代に引き戻されたくなく、後進国は「石器」時代から這い上がろうとするだけの争いの会議になってしまっている。

(b)IPCCの行動を新興宗教に例えた人が何人もあった。宗教では、疑問を持つ者は異端者として取り扱われるからである。

(c)国際情報について、日本はまだまだ極東の島国である。政治家、官僚、科学者、報道もIPCCや欧米代表の建前を危機、鵜呑みにしてまじめに信ずるばかりではないか。

(d)環境団体は、本来の目的である現在目前に起きている汚染、破壊問題に専心すべきである。環境汚染/破壊を炭酸ガスの問題と混同すると、人類全体の責任となるため、汚染、環境破壊、乱獲、不法猟などの「犯人」が全体責任の陰に隠れてしまうことになる。

### 【メディアの誤り】 (米地球物理学学会週報2008年)

- ①メディアは気候変動と人為的温室効果を混同している。
- ②氷河が流れて崩れるのは当たり前だが、見た人は驚いて人為的気候変動のせいにしてしまう。また、氷河の衰退は1800年代から続いており、最近急に始まったわけではない。
- ③断熱がしっかりしていれば家は崩れないのに、永久凍土が融けて崩れるのを撮影したがる。
- ④温室効果ガスの排出よりも、森林伐採や魚の乱獲の方が、悪影響が大きい。
- ⑤昔のことをきちんと調べないで、短期間の変動を「いまだかつてない」と報道する。
- ⑥報道関係者はしっかりした科学的素養を身につけ、科学をわかっていること、また分からないことを正確に報道すべきだ。